様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３４４１７
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ１７４５８

研究課題名（和文）初期・二次救急外来受診後、帰宅する高齢者世帯患者に対する看護実践モデルの検討

研究課題名（英文）A Study of Nursing Practice Model for Elderly Patients discharge from Emergency Department Visits

研究代表者
山口　真有美（YAMAGUCHI, Mayumi）

関西医科大学・看護学部・助教

研究者番号：９０５９９９９５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、「救急ー在宅連携・循環型アセスメントモデル」の原案を作成した。在宅医療・看護・介護に関わる専門職を対象に調査した結果、病院受診した後の帰宅患者は、医療者側の情報伝達不足により、身体状況の変化に伴う生活の変化を想像できておらず、これまでの生活との乖離を自覚出来ていない。一方、訪問看護師と救急看護師の思考及び実践には類似点や連続性がみられ、 親和性が高いことも明らかにした。このことから、救急外来においてトリアージ・帰宅時アセスメント・在宅ケアでのアセスメントを連動させたツールを構築することは可能である、との結論を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
「救急ー在宅連携・循環型アセスメントモデル」は、救急外来看護と在宅看護、それぞれの現場での（１）病態の急性変化・短期的な予測、（２）看護師不在の自宅生活において患者と家族が困ることは何か、という生活上の見通し、（３）少ない情報から短時間で患者の状態変化をアセスメントする、という類似点に基づき作成される。そのため、救急外来看護師と在宅ケア看護師それぞれの立場での、地域で生活する患者の救急受診に関連するリスクアセスメントの視点や、コーディネート役割を明確にすることで、双方向的な連携の可能性を見出すことができる。これにより不要な救急受診を未然に防ぐという先手を打ったケアの実現につなげられる。

研究成果の概要（英文）：In this study, a draft of the "Emergency - Home Collaboration and Circulation Assessment Model" was developed. As a result of a survey of professionals involved in home medical care, nursing, and nursing care, patients who return home after a hospital visit are not able to imagine the changes in their lives that accompany changes in their physical conditions due to insufficient communication of information on the part of medical professionals, and are not aware of the deviation from their previous lives. On the other hand, there were similarities and continuity in the thinking and practice of home health nurses and emergency nurses, indicating a high degree of affinity. As a result, we concluded that it is possible to construct a tool that links triage, assessment upon return home, and assessment at home care in the emergency room.

研究分野：救急看護

キーワード：救急外来　高齢者　救急帰宅患者

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（1）わが国の救急外来看護師たちは、独居高齢者もしくは老々介護といった家族の協力が得られない《帰宅後の家庭看護力が脆弱な患者》を帰宅させることに困難や課題を感じている。また、こうした患者を救急外来から帰宅させる際、救急外来の看護師たちは帰宅後の看護力や介護力を確認し、看護を継続させるための調整を心がけている（山口,2015）。しかしながら、時間や患者数、緊急度・重症度の予測がまったくできない時間外の外来診療と救急車で搬入されてくる救急患者に対応せねばならない状況で、救急外来看護師たちは、帰宅可能ではあるが帰宅後の看護力に不安のある高齢者世帯患者への対応に苦慮している。

（2）病院の救急外来を受診した高齢者世帯の患者を帰宅させる際、帰宅後は誰がどのように患者を見守り、何かあった場合の対応をどうするか、少子高齢化の現状においては早急に取り組むべき問題である。しかし、この問題について、救急医療側だけでは解決は困難であり、地域医療との連携は不可欠である。訪問看護などの在宅支援を利用している高齢者世帯であれば情報共有やその後の連携の可能性も考えられるが、利用していないケースなども検討していかねばならない。

２．研究の目的

本研究は、救急外来受診後に帰宅する高齢者世帯の患者に対する救急外来看護師の看護実践モデルを検討することを目的とした。

３．研究の方法

（1）日本国内の救急外来受診後帰宅する患者への看護の実態を明らかにする。

（2）海外（米国）の救急外来受診後帰宅する患者への看護の実際をヒアリングする。

（3）訪問看護ステーションでのフィールドワークにより、救急外来を受診した実際の患者と訪問看護師の看護の実態について明らかにする。

（4）**上記の調査結果を踏まえ、救急外来受診後に帰宅する高齢者世帯の患者に対する看護実践モデルを検討する。**

４．研究成果

3 年間の調査において、地域住民の生活に入り込むタイプの看護を実施している救急看護師の存在や訪問看護師と救急外来看護師のアセスメントの類似性を明らかにした。それをもとに「救急在宅連携循環型アセスメントモデル」の案を作成した。（図 1）

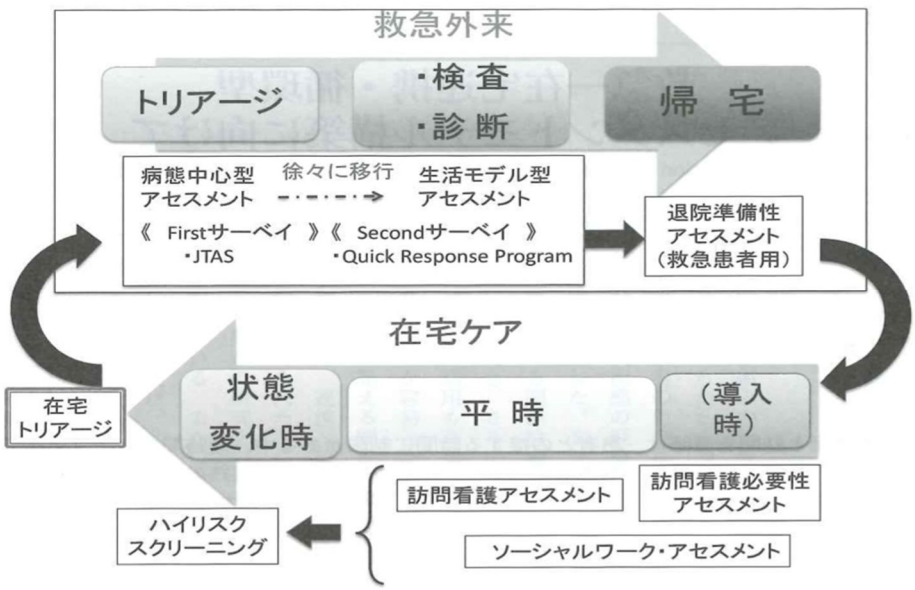

図１．救急在宅連携循環型アセスメントモデル

図１について理論的基盤構築をしていくため、各国の医療情勢や日本国内での救急と在宅連携の実態を把握するための文献検討を実施した。本研究の目的に適した 24 文献を得て、関連文献では社会的背景として、無保険患者や、頻回に救急受診する患者で帰宅後の在宅ケアを必要とする患者を対象としていることを明らかにした。これらは「患者特性」「救急外来受診後に患者の抱える問題」「救急部所属の在宅ケアコーディネーターの配置」「ケアマネジメント・ ケアプログラム」の 4 つカテゴリーに分類された。一部の文献では、救急部門のトリアージナースが帰宅後のハイリスク患者を予測し利用可能なサービスを手配するよりも、患者の救急受診に関するリスクスクリーニングにおいては地域の経験豊富なコミュニティナースのほうが有用であると指摘するものもあった。

上記結果をもとに全国調査を実施予定であったが、2020 年 1 月以降の新型コロナ感染増加の影響により倫理審査会の延期、対象者である独居高齢者への研究協力依頼が困難となり、実際の実態調査を実施することができなかった。

しかしながら、本研究の研究成果として、救急外来看護師と在宅ケア看護師それぞれの立場での救急受診に関連するリスクアセスメントの視点やコーディネート役割を明確にすることで、双方向的な連携の可能性が見出だせることが推測された。これにより不要な救急受診を未然に防ぐという先手を打ったケアの実現につなげられると考えられた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 山口　真有美	４．巻 6
２．論文標題 救急―在宅連携・循環型 アセスメントモデル構築に向けて For construcion of Emergency - Home care cooperation assessment model	５．発行年 2019年
３．雑誌名 地域ケアリング	６．最初と最後の頁 64-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山口 真有美，瀬戸 奈津子，清水 安子	４．巻 38
２．論文標題 初期・二次救急外来における入院せず帰宅する患者に対する救急看護認定看護師の看護実践	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本看護科学会誌	６．最初と最後の頁 176-183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5630/jans.38.176	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山口 真有美，瀬戸 奈津子，	４．巻 印刷中
２．論文標題 初期・二次救急外来における入院せず帰宅する患者に対する看護の重要度の認識と看護実践 -近畿圏内救急看護認定看護師への質問紙調査から-	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本救急看護学会雑誌	６．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 山口真有美
２．発表標題 救急―在宅連携・循環型 アセスメントモデル構築に向けて
３．学会等名 第22回日本臨床救急医学会学術集会（和歌山）
４．発表年 2019年

１．発表者名 山口真有美
２．発表標題 救急看護の現場から※救急看護師の立場から救急外来看護の実態、対応困難事例
３．学会等名 第39回日本看護科学学会学術集会　交流集会　　救急外来患者への「帰宅時の支援」を考える：救急医療と地域連携のあり方
４．発表年 2019年

１．発表者名 Mayumi Yamaguchi
２．発表標題 Literature Review：Transition of nursing from emergency room to homecare nursing
３．学会等名 23rd EAFONS2020（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 山口真有美
２．発表標題 救急看護実践の展望-研究者の立場から-
３．学会等名 第20回日本救急看護学会学術集会（和歌山）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Mayumi Yamaguchi, Natsuko Seto
２．発表標題 Patient Education for Patients Only Requiring Outpatient Treatment: Certified Nurses in Emergency Nursing in Primary or Secondary Emergency Departments in Japan
３．学会等名 22nd East Asian Forum of Nursing Scholars（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 山口真有美
２．発表標題 救急病棟における継続看護の認識と実践
３．学会等名 第19回日本救急看護学会学術集会
４．発表年 2017年

１．発表者名 MIyoko HAYASHI,Rie Matsui,Mayumi YAMAGUCHI,Tomomi MORI
２．発表標題 Nursing support for the family members of cerebral stroke patients in the acute to subacute stage.
３．学会等名 18th EAFONS（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関